

どんな人でも「衣食住」に困らず
人間らしい生活と健康を保てる社会にしたい



働く女性の全国センター 伊藤みどりさん

聞き手 編集部

「貧困女子」という言葉が生まれるほど女性の貧困問題が深刻化し、生活に不安を抱えている女性が増えている。伊藤みどりさんは、20年以上前からこうした問題に着目し、女性のための女性による労働組合「女性ユニオン東京」や、女性たちが安心して意見交換でき、つながり合える組織「働く女性の全国センター」を結成し、女性たちの声に耳を傾け続けている。伊藤さんの目に、日本の社会はどのように映っているのか、そしてどうあるべきだと考えているかなどについて伺った。

最初に就職した会社で 活動家のような言われて

—女性の労働問題に関わるようになってからは、どういったきっかけからなのでしょうか。

伊藤 もともとはアート関係の仕事に就きたいと思っていました。高校卒業後、長野から上京して美大受験予備校に1年ぐらい通いましたが、美大に行くのを諦めて東京で働くことにしました。今から40年くらい前のことです。

そのときまたまた就職した中小企業の会社で、労働問題に関わったのが最初のきっかけです。その会社が経営していた工場では、中学校を卒業したばかりの女子たちが、ベルトコンベア作業で作業のような速さで電話機を組み立てていて、チャップリンの映画『モダン・タイムス』みたいな風景ってまだあるんだなど、カルチャーショックを受けたのを覚えています。

ある日、深い意味もなく「生理休暇をとります」と言ったら管理職からすぐ攻撃されて、それに反論したら

PROFILE

●いとう・みどり●

1952年長野県生まれ。1977年より電機連合（旧・電機労連）の企業内労働組合で活動し婦人部長を務め、1983年より総評全国一般労働組合東京地本三多摩支部で活動し執行委員を務める。1995年女性ユニオン東京を結成。2001年NPO法人サポートハウスじよむを設立後、2007年働く女性の全国センターを結成。働く女性の全国ホットラインによる相談活動、ワークショップや講演活動などを行いながら、「働く」ということの本来の目的や目指すべき社会の在り方について訴え続けている。

ちょっととした騒ぎになりました。その途端に、労働組合の婦人部の人たちが「伊藤さんは活動家のようなだ」と言われて（笑）。それで婦人部に入ることにになり、女子社員寮のお風呂増設や過剰労働などさまざまな問題について、会社側と交渉するようになりました。

—どのような雰囲気職場だったのでしょうか。

伊藤 会社の広場みたいなところにみんなが集まって、職場の不平等や困り事を、学歴に関係なく誰でも発言でき、それを労働組合が吸い上げるといったような、ざつとばらんな雰囲気がありましたね。みんなで助け合うとか一緒に話し合うとか、健康を害さないように会社側に交渉して改善してもらうとか、そういうことができるゆとりがありました。

でも、そのうちバブル景気になって、日本の工場が東アジア、マレーシアやインドネシアに移り、その工場自体も様変わりしていき、労働組合も現場の人たちが積み上げていく形ではなくなっていました。

その会社を辞めて中小企業を転々とする中で、全国一般労働組合で労働問題に取り組むようになったのですが、

されてからです。

当時は、女性を保護するのは時代遅れだと考えられていて、「男性と同じように働いて競うことが男女平等への道だ」みたいに言われていました。だから、子育てや介護を抜きにした、男性の「働き過ぎモデル」に女性を合わせてしまったのです。私はその逆で、男性が女性の働き方に合わせるべきだったと思います。

この99（平成11）年を境に、メンタルヘルスケアが必要な人の相談が激増

女性の労働問題をライフワークにしようと思ったのは、このころです。

—その後、女性ユニオン東京を結成することになるのですか。

伊藤 バブル経済崩壊後、中高年女性のリストラや女子大生の就職難、セクシャルハラスメント（以下、セクハラ）、労働者の妊娠・出産が問題になってきたことから、女性による、女性のための労働組合をつくる必要があるのではないかという議論が組合内部で起り、1995（平成7）年3月19日、女性ユニオン東京を結成しました。

準備段階から新聞で取り上げられていたこともあって、その日から事務所が女性たちで溢れ、電話が鳴りやまないといった状況でした。でも、地下鉄サリン事件の前日でしたから、結成がちょっと遅かったら日の目を見なかったかもしれないですね。

しました。女性や何らかのハンディキャップを持つている人たちは、最初に危険を察知する。炭鉱のカナリアのように、今でいうブラック企業や長時間労働、ハラスメントなどにいち早く反応していたのだと思います。

—働く女性の全国センター（Action Center for Working Women 以下、ACW2）を結成したのは、そういった背景からでしょうか。

所狭しと資料が差し込まれている本棚からは、ACW2のこれまでの歩みがうかがえる

伊藤 1990年代に非正規雇用化が急激に進み、パートタイム労働者（以下、パート）や派遣労働者からの相談が増えてきました。彼女たちのうち、正社員のように労働組合に入って会社と交渉したり裁判で争ったりできる人は、ごく一部の経済的にゆとりのある人

—女性ユニオン東京を結成し、まずどんなことを感じましたか？

伊藤 当時は何をやるにしても「主人に相談してみます」と言う人が多くて、女性自身が主体的になることが意識化されていないことを痛感しました。それと、女性の労働問題に特化して相談を受けてみると、問題を抱えている女性たちは表に出ていないだけで、想像以上に多くいることが分かりました。

女性たちは「炭鉱のカナリア」

—女性を取り巻く労働環境は、どのように変わってきましたか？

伊藤 大きく変化したのは、85（昭和60）年に男女雇用機会均等法ができてからです。さらに激変したのは99（平成11）年に女性の残業・深夜労働・休日労働を制限した女子保護規定が撤廃

たちです。それから、精神障害を抱えている相談者や、心が傷ついて自己肯定感が低くなり人を信用できなくなっている相談者が増えたので、そういう人たちが孤立せず、何でも安心・安全に話せる場所が必要だと思いました。それで2〜3年じっくり話し合って準備し、2007（平成19）年にACW2を結成しました。

ここでは、労働法など法制度の知識や最新の労働情報なども提供して、緩やかなつながりをつくりながら活動しています。柱の事業は、フリーダイアルで相談を受ける「働く女性の全国ホットライン」（以下、ホットライン）活動と、相談員トレーニングやワークショップなどの教育活動です。

安心して意見交換できる土壌を「かます」

—では、ホットラインではどういった形で相談に乗っているのでしょうか。

伊藤 相談者の話を傾聴して情報は提供しますが、選択するのは相談者で、

自分の力で歩んでもらうようにしています。それがたとえ遠回りな選択だとしても、結果的に本人に納得してもらったことが最も大事なのです。自分で選択したことなら、つらくても乗り越えていくのですが、人からやらされていくとつらさが違いますから。

私たちは、よほど本人が希望しない限り、裁判を勧めないようにしています。その人の荷物を一生背負えるなら、裁判で解決することを提案できるかもしれないですが、そうではないのに、相談員の正義感だけで無責任なアドバイスをする余計にその人を傷つけてしまうので、その点は慎重に対応しています。例えばセクハラ問題では、思い出したくない嫌なことを全部、自分で証言しなくてはならないし、相手側の弁護士から意地悪な質問をされますから、二重三重にダメージを受けること

になるのです。

— ホットラインの相談内容から見える最近の傾向について教えてください。

伊藤 昔は雇用や労働に関する相談が多かったのですが、今ははじめやハラスメントなど人間関係に関わる相談が増えていきます。傷つけ合うことは人間だからしょうがないと思いますが、人と人とのコミュニケーションが薄くなつたためかそれを修復できず、余計に傷つけ合ってしまうのではないのでしょうか。上司が部下から、正社員がパートからいじめやハラスメントを受けたというケースも増えていて、立場上の力関係は関係なくなってきています。

雇用問題という点、解雇や雇止め、労働時間の延長、雇用形態の変更や降格、減給などの相談が多いですね。また、社会全般の傾向として、一月60時

間以上残業をしている働き過ぎの人が増えている一方で、たくさん働きたいのに1日4時間程度、週3日の仕事しか見つからず、ダブル、トリプルワークをしないと生活できない人が増え、2極化してきています。

— ホットラインの相談内容は社会の縮図というか、そこには社会問題が映し出されているので、私たちは得られた

情報を、国会の労働政策や厚生労働関係の政策に生かしていただけるように提言しています。

— では、ワークショップはどのような目で進めていますか？

伊藤 セルフケア、自己肯定感やコミュニケーション力を高める、人の話

をよく聴く、安心して意見交換できる場所づくりなどを目的としています。上から下へ「正しい知識」をたたき込むのではなく、参加者同士が意見を交換しながら学び合える「参加型体験学習」の形で行っています。

ACW2は、準備期間も含めて約10年活動していますが、最近になってやっと、対話やつながりを持つために

はこうした教育活動が必要だということですが、メンバーの共通認識になってきました。「つながる」と言葉で言うのは簡単ですが、ピンポン玉を打ち合うような、ゆつたりとした言葉のやりとりができるということが、いかにメンタルヘルスケアにおいて効果的かというのを、やっとみんなが実感できるようになりましたね。個人が尊重され、

働く女性の全国センター 長期ビジョン

～100年を見通して～

(1) 団体のありかた

誰かを蹴落とすこと、優位に立つことをしごとを求めるのではなく、従属や支配ではない尊重をもとにした関係を、しごとの場において作り出すことを、わたしたちは目指す。わたしたちは、命の側に立ち、人びとの前に、そして女の前に立ちほだかるしごとに伴う搾取・差別・偏見・欺瞞に抵抗する。抵抗することに疲労を感じる時は、休み、涙し、力を与え合い、笑う。

(2) 「はたらく」定義

労働者という肩書きは女性たちにはよそよそしい。なぜなら、女性たちは肩書き抜きに「はたらいてきたからだ。はたらくとは、キャリアを積み上げることではない。はたらくとは、命を支えることだ。この団体において「はたらく」とはなにか。賃金が払われる労働・必要ではないとされる支払われない労働いかに関わらず自分を支え、人を支え、命を支えるあらゆる営みである。

(3) 女性の分断をこえる

女性はいまだに、分断されている。独身か主婦か、パートか正社員か、民間か公務員か、零細企業か大企業か。権力がわたしたちを引き裂く。わたしたちもまた、立場の違いによって相手の声に耳をふさぎたくなることもある。だが、引き裂かれた裂け目に、わたしたちは橋を架ける。意見の違いを認め、批判も行う。それは互いを遠ざけ合うためにではなく、すべて橋を架けるため。

(4) 社会への姿勢

いつの日か おんなであること、しごとをすることが、搾取や差別や暴力の対象や温床となるのではなく、与え合うこと、豊かにし合うこと、平和を生み出すものとなるためにその日まで、わたしたちは休みながらも歩むことを、ここに記す。

(2012<平成24>年作成)



伊藤さんはここでホットラインの相談に乗っている

安心・安全に意見を言い合える土壌をくかもす」と、人は変化し元気を取り戻すということが、やっと見えてきたところですよ。

ワークショップには、化学物質過敏症の人や聴覚障害者などが参加してくれたこともありすが、障害を持つ人に合わせたテンポになると、すごくいい相乗効果になります。私たち女性は「女は……」「パートは……」などがある意味、社会や組織の中で差別された経験がある分、障害者にどういう配慮が必要なのかということも、男性より意識していると思います。弱い人たちが安心できる場所は誰でも安心できる場所だということを、私たちは言葉ではなくて、実践によって示しています。

—ACW2のメンバー同士のつながりから生まれたことや、メンバーによって発展していったことも多いのではないのでしょうか。

済のグローバル化によって企業はもうかる」といわれている割には、どこもかしこも行き詰まってきているんじゃないですか。それって、本末転倒ですよね。

医療費がかかり過ぎるともいわれています。働き方を変えないと健康を維持できませんし、医療の問題も地域保健の問題も改善されなれないと思います。これだけメンタルヘルスケアが必要な人が増えている状況を改善するた

伊藤 それはたくさんあります。例えば、改正労働者派遣法は成立し、私たちが望むとおりにはなりませんでしたが、派遣労働者のメンバーが当事者として多くの意見を提出したことによ

り、法律とまではいなくても指針として盛り込まれたことが幾つかあります。それらが実行されるかは分かりませんが、国は私たちの声を無視できなくなったと思います。そして、活動の過程で知り合った派遣労働者たちが、派遣向上フォーラムを結成して新たなつながりをつくり、生き延びる道を考えています。

それから、相談員トレーニングは、ACW2と*1NPO法人サポートハウスじよむとの共催で定期的に行っているのですが、トレーナーは、アメリカで3年かけて傾聴トレーニングを学んできたメンバーのカウンセラーです。

めには、経済界抜きには語れないと思います。かつて日本の企業社会は、人間を基礎に一つくられていました。ところが今は、従業員に対して「あなたの代わりの人はたくさんいるから」といった意識を持っている企業も多いと思います。従業員を大事にすることで企業のイメージアップを図り、それで業績を上げていくという発想が壊れてしまったというか。従業員も、その企

制約がある人の働き方を標準労働のモデルに

—労働問題に関わるようになってから今日までの社会を見てきて、どのように感じていますか？

伊藤 私たちは、便利さや豊かさに対する価値観を見直さなくてはならないと思います。地球環境もおかしくなっていますし、それによって人間の体のリズムも狂ってきています。その根源には、働くことに対する考え方が変わってきたことがあると思います。

昔は、働くことで社会とつながり、生活を豊かにして自分の健康を維持し、次世代を生み出すために働いていたはずなのに、今、職場は仲間を蹴落としたり、命を縮めたりする場所にもなっています。企業は利益ばかりを追求するのではなく、人間を基礎にして経営を考えるべきだと思います。「経

業に貢献したいから頑張るというよりも、自分が出世することはかりを考え、いす取りゲームのように争って、人を蹴落としても構わないと思っている人が増え、モラルが崩れてきていると感じます。

—では、伊藤さんが考える理想的な労働者の姿とは？

伊藤 養育が必要な子どもを抱えているとか、親の介護をしなくてはならないとか、障害を抱えているとか、そういった制約がある人の働き方を標準労働のモデルにするべきだと思います。制約がある労働者でも「衣食住」に困らず、人間らしい生活と健康を保てる

*1「女性が心の元気と心からの笑顔を取り戻す過程をサポートする」ことをミッションとして活動する組織で、2001（平成13）年設立。伊藤さんはこの設立に関わり、現在は運営委員を務めている。



ようにしなくてはなりません。

男性の貧困化も深刻になってきています。「男が妻子を養わなければならぬ」という意識が男性たちをより苦しめているのではないのでしょうか。女性が心身共に自立できる労働とセーフティネットを充実させることが、男性の貧困問題の解決にもつながるはず

です。
そこで、私たちは1年間かけて、働くことや生きることについて話し合い、100年先を見通したビジョン「働く女性の全国センター 長期ビジョン（100年を見通して）」（107頁参照）を作成し、活動の指針に掲げています。

若い人たちの力を信じたい

—多忙な日々を送られていることと思いますが、健康のために気を付けていることはありますか？

伊藤 ストレスを感じたら自分を癒やすように心掛け、コーピングスキルを高めるようにしています。スカットするドラマを見る、泣きたくても泣けないときに自然に泣けそうなドラマを見る、ストレスを家の中に持ち込まないようにする、困ったことは人に話す、ネガティブな思考を脳にコピーしない、ということを意識することで、だいぶ楽になります。メンタル面が健康でないと食事もうまくとれなくなるし、行動もできなくなりますから、メンタルヘルスケアが第一ですね。

—2014（平成26）年に、40代の栗田隆子さんにACW2の代表のポストをバトンタッチしていますが、それは世代交代を意識してのことでしょうか。

伊藤 もちろんです。やはり、今の時代の問題は、問題を抱えている人と同じ

伊藤 今は良い世の中とはいえませんが、貧困問題にせよ健康問題にせよ、人とつながっていれば何とかなるとは思います。私自身も、足を骨折して

しまい、やっと歩けるようになったかと思ったら、家族の問題で実家がある長野と東京を行き来しなくてはならず大変だったのですが、人とつながって

じ世代の人たちが中心になって取り組んでいったほうがいいですから。ACW2は、世代交代がうまくいつている組織だと思います。若い人たちの力が湧き出てきて、彼女たちがACW2を自分たちの組織だと認識するようになって、やる気になってきたと思います。やっとなの見通しが立ってきたという感じですね。

—最後に、読者に伝えたいことを教えてください。



ワークショップで使用するテキストには、ACW2のノウハウが詰まっている

いると何とかなるものだと痛感しました。

つながりが途絶えて人との関係が消えてしまうと、「助けて」も言えなくなりそうです。「助けて」が言える社会関係が基本で、そういった関係を絶えさせないようにしなくてはならないですね。ホットラインは、そのための一つのツールだと思います。

あとは、若い人の力を信じたいですね。若い人たちは就職難などで世の中に希望を持っていない分、ある意味でサブイバル力が強いとか、自分の力でどうやって生きていくかということを深く考えていると思います。だからこそ、制約がある人の安心・安全と一緒に考える力を持っていて、弱い人も排除せず仲間として認めていくことができるのだと思います。

きっとこれから、私なんかは想像もつかないことが起こるのではないかと期待しています。

職場のストレスは万病のもと。ひとりで悩まず相談してください。（相談は無料、秘密は厳守します）

やめない！負けない！あきらめない！
働く女性の全国ホットライン
フリーダイヤル なやみな くそうコール
0120-787-956
解雇・雇用不安・セクハラ・いじめ・長時間労働など職場のあらゆる悩みの相談受け付けます。

- 毎月5日、10日、15日、20日、25日、30日（年末年始など休み）
- 平日 18:00から21:00/土日祝 14:00から17:00
- 毎月5日は、セクハラ集中相談日

組織 財団法人 伊藤会

働く女性の全国センター ACW2
Action Center for Working Women
愛も、仕事も、生きがいも

働く女性の全国センターACW2は、07年1月に発足し、働く女性の全国ホットラインのほか、ロビー活動や、アンケート調査、全国での講習会や集会を行っています。あなたも、女性たちによる女性のための、このネットワークに参加しませんか。

会員も募集中！年会費2,000円 詳しくは <http://acw2.org>

働く女性の全国センター 〒110-0015 東京都台東区東上野1-20-6丸幸ビル3F
tel: 03-6803-0796 fax: 03-6803-0726 e-mail: office@acw2.org